京都府が進める「京都式えらべるデイサービス」の新しさ

本能老人デイサービスセンター（京都府京都市）より ― その1

佐藤 幹夫

介護サービス内容の発想の転換

これまで、認知症への取り組みに力を入れているデイサービスを取材するたびに、ひそかに感じてきたことがある……ここで取り入れようとしているメニューや対応の（対人援助の）スキルは、かつて筆者が養護学校（現・特別支援学校）時代に身につけようとしてきたことと、重なるところがとても多い。介護現場のスタッフは、近隣の特別支援学校に視察に行き、授業を見学したり情報交換を図るなりすれば、取り組みはさらに充実するのではないだろうか。少なくとも参考になることは少なくないと思う……。

どこまで自信をもって提言してよいか、いま1つ確信をもてずにいたのだが、今回京都に出かけ、「京都式えらべるデイサービス」の説明を受けながら、この印象は間違いではなかったと、はっきりと感じた。

推進の中心は京都府健康福祉部・高齢者支援課。その担い手である「長寿・介護予防担当」の船越理志主査から、概要説明と2つのデイサービスの紹介を受けた。京都市内の中心区域にある「本能」（社会福祉法人京都福祉サービス協会）と、丹後半島の入口、宮津市の天橋立のそばに位置する「天橋の郷」（社会福祉法人北星会）。今回から2回にわたってその報告となる。（ちなみにここでの筆者のテーマは、介護現場と特別支援教育、保育など、現場の「連携」をどうつくるかという問題へとつながっていき、前回、幼老混合型スタイルのベルタウンを紹介したこととも連なるものである）

さて、「京都式えらべるデイサービス」とはどんな取り組みなのか。ひと言でいえば、運動、物作り、音楽など数種類の活動を用意し、利用者の希望を聞きながら小グループに編成する。そして単発ではなく、ある一定期間にわたって組織的に実施していく、というものである。京都府ではモデル事業を推進し、モデル事業所や専門家と議論を重ねながら、「実施マニュアル」を作成してきた。内容や方法の整理・統合が進んでいるが、当然ながら取り組む事業所によって特色がある。また特色はあってよい、実施マニュアル通りに行わなければならないものではない、と船越主査は言う。

「大事なことは、利用者が喜びを感じ、生きがいとなるような活動をどこまで用意できるかです。普通、デイサービスに行けばやりたくないこともやらされるし、お年寄りたちも、仕方がないから言われる通りにやるけれども、本当に楽しいのだろうか。自分だったらちょっとなあ。見学に行くたびにそう感じることが多かった。自分が利用者の側になったとき、これだったら毎日でもやってみたい。そう感じるサービスを提供するのが大事なのではないか。それが

最初の発想でした」と船越主査は言う。

これは大事だし、正当な受け止め方だと思う。以前、山口県の「夢のみずうみ村」に取材に行き、ダイナミックでユニークな取り組みの一端を報告しているが（本誌2007年7～8月号）、「夢のみずうみ村」は「京都式えらべるデイ」の先駆的形態と言ってよい（筆者にはそのように感じられた）。そのとき利用者の1人に、「とても楽しそうですね」と声をかけると、「ここは年寄りをバカにしていないから」という答えが返ってきた。余計な説明は不要と思う。以来、重い言葉として筆者のなかに残った。介護のみならず、対人援助職の難しさをズバリと突きつけられた言葉だった。船越主査と同じことを、この利用者は言っていたのだと思う。

支援するスタッフは、何をしなければならないか、一生懸命に考える。そのことは大事だし、基本である。それとともに、あるいはそれ以上に、利用者の側がどんな体験として受けとめているのか。その視点も基本中の基本だと教えられてきた。

> 京都式えらべるデイでは
> 何が目指されているのか

ちなみに「京都式えらべるデイサービスの目的」は以下のように述べられている。

「高齢者が楽しみ・やりがいを感じながら、意欲を持って自主的・継続的な活動に取り組めるよう個別ケアを実施することにより、生活機能を向上させ、介護予防となることを目的としたデイサービスを提供する」

ここには、「楽しみ・やりがい」に続く2つ目のキーワードが示されている。「やらされる」のではなく、「意欲を持って自主的」に、進んでやること。受身的活動から能動的活動へ――。これまたよく了解できる提言である。医者でも介護の専門家でもない筆者に迂闊なことは言えないが、この「自主的・意欲的」というねらいがうまく展開できるなら、それに勝る介護予防、認知症予防はないだろう。

人間というものは不思議なもので、嫌なことは10分ともたない。苦痛な10分は1時間にも2時間にも感じる。ところが好きなこと、楽しいことであれば、あっという間に時間が過ぎる。脳や心や身体が、どちらの場合、活発に活動しているか。これまた言うまでもない。心を躍らせながら1日を過ごすとき、脳も身体もフル回転しているはずで、このことに勝る介護予防はない、と考えるがいかがだろうか。前回も、そしてこれまでにも幾度となく指摘してきたように、心が動けば身体も動く。動かそうとする。心と身体が動けば、おのずと脳も動く。

さて、では自主的・意欲的活動が可能となるために何が重要か。まずは利用者であるお年寄りたちが何を望んでいるか、好きな活動がなん

であるかを把握し、一人ひとりのADLや介護度などを丁寧にアセスメントすること。活動のメニューがそろったら、次は用意された「小グループ活動」（「本能」では「ユニット型レクリエーション」と呼んでいた）を、計画性と意図（目的・目標）を明瞭にして組織することだと思う。1日をどう組み立てるか。ワンサイクルをどう構成するか（短期目標）。1年をどう組織するか（長期目標）。さらには、事前のアセスメントは的確だったか、自分たちが行った活動や援助の方法は妥当だったかと振り返る「自己評価」の作業も必要となる（利用者への評価とは、そこへかかわった自分自身に対する評価である）。船越主査が、京都式のカギは”個別ケア“だと強調するように、基本はあくまでも”一人ひとり“への視点である。

そのほか「実施マニュアル」に触れながらいろいろと興味深いお話をうかがうことができたのだが、筆者なりにまとめると、「好きで楽しい活動を用意する→計画性・継続性をもって組織する→自主性・意欲を引き出す→評価」とまとめてよいだろう。

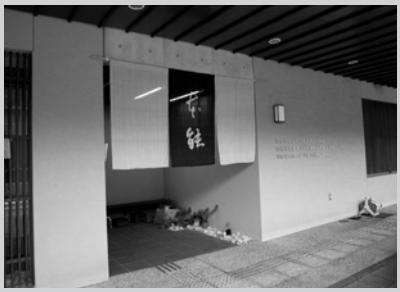
加えて2つのことを補足するならば、「京都式えらべるデイサービス」は、おそらくは介護現場にあっては初めての取り組みであろうから、スタッフ全員が、なぜ、何を、なんのために、どんな方法で自分たちがしようとしているのか、共通理解しておく必要がある。実施マニュアルの最初に指摘されているのが、その重要性である。

2つ目はまとめられた「実施基準」の6番目に、「ボランティア（元気高齢者）の活用」が推奨されていた点である。現場取材に行ったとき、簡単にはいかないと指摘する声があったし、たしかにそれは筆者にも理解できる。ボランティアはやはりボランティアであり、スタッフと同じではない。どこまで同じ視線に立つことを要求できるか。こちらが望んでもボランティアの側が理解してくれるか、といった課題がある。ただし、京都府が打ち出したこの方向性自体は賛同できるものだ。団塊世代を見すえ、間もなくやってくる超高齢社会への先取り的対応が目指されていることが理解されるからだ。無理せず、時間をかけた取り組みが必要だろうと思う。

本能老人デイサービスセンターの取り組み

現在、京都府が把握しているだけでも40施設以上がこの「えらべるデイサービス」を始めているというが、その1つである「本能」について紹介したい（あの「本能寺の変」の本能、元本能寺南町という地名が名前の由来である）。「本能」は、デイサービスをはじめ、特別養護老人ホーム（定員90名）、ショートステイ（10名）のほかに、地域包括支援センターや居宅介護支援事業を有している。筆者が訪れたのは午後1時半近く。

京都府健康福祉部の高齢者支援課で「長寿・介護予防担当」を務める船越理志さん。



本能老人デイサービスセンターの外観は、料亭さながらの雰囲気を醸し出している。街の景観を損なわないように配慮がなされているからだ。

利用者全員で曲に合わせて運動（体操）をしており、レク活動が始まったのはその終了後だった。

案内をしてくれたのは主任生活相談員の森賢一氏。森さんによれば、2005年10月、京都府が「えらべるデイサービス」を提案した時期とちょうど重なる頃、同じような取り組みを始めていたという。その口調からは、当初もその後の歩みも、言われるままに京都式の「えらべるデイサービス」を受け入れてきたのではなく、情報交換や助言を受けながらも、自分たちで独自の歩みを試行錯誤してここまできたのだという自負が感じられた。

森さんは自分の祖父が、デイサービスから持ち帰る習字や塗り絵などの作品を見るたびに「自分の知っているお祖父ちゃんはもっと字がうまいし、絵もうまいのに」と残念な思いをしてきたという。職員の人たちが、がんばりましたよ、よくできましたよ、と話すのをいくら聞いても納得できなかった。自分が介護の仕事にかかわるようになった最初の頃も、結局はスタッフがほとんど作ってしまうことになり、そういうものを持って帰ってもらうことに大きな疑問を感じていた。そうしないためにはどうしたらいいのか。それを考えたことが出発点だったという。

そしてもう1つ、では通所系のサービス施設の役割は何かということも、スタッフたちの問いだった。リハビリをし、お風呂に入ってもらい、家族の負担軽減をする。それだけなのか。そうではないはずで、いろいろな人に出会い、いろいろな場所に出かけ、何かしらの役割を担う。そのような社会交流の場、社会活動の場なのではないか。かつては当たり前だったそうしたことを、少しでも体験してもらう。そのような場にすることはできないかと考え始めたという。

そのためにも、お年寄りがどんな存在なのか、スタッフがもっと知る必要がある。レクリエーションの内容やスタッフの役割を、もっと組織的に考える必要もある。自分たちが何をしようとしているか、その内容を充実させ、方法の精度を上げるためには、相手（利用者）についてもより多くのことを知らなくてはならない。「本能」における取り組みは、そんな方向に進んでいくことになる。

次回は、その詳しい内容について紹介したいと思う。（ついエラそうに書いてしまったかもしれない。現場時代、どんなふうに発達に遅れのある子どもたちと接してきたか、拙いものではあるが、『ハンディキャップ論』、『「自閉症」の子どもたちと考えてきたこと』などをお読みいただければ幸いである）。

■さとう・みきお（フリージャーナリスト）
養護学校教員を経て平成13年からフリージャーナリストに。著書に『ハンディキャップ論』（洋泉社・新書y）、『裁かれた罪　裁かれなかった「こころ」―17歳の自閉症裁判』（洋泉社）、『「自閉症」の子どもたちと考えてきたこと』（洋泉社）。近著に本連載が基となった『ルポ　高齢者医療―地域で支えるために』（岩波新書）がある。共著に『刑法三九条は削除せよ！　是か非か』、『少年犯罪厳罰化　私はこう考える』（いずれも洋泉社・新書y）など。

本能老人デイサービスセンターの主任で生活相談員も務める森賢一さん。

取材当日の午後に行われた個別レク活動の一幕からは、和やかな様子が伝わってくる。